
床屋蕎麦

催吐剤

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

床屋蕎麦

【Nコード】

N1830U

【作者名】

催吐剤

【あらすじ】

あ、特にありません。

この間床屋さんに行きました。なぜ今どきの若い者が美容院ではなく床屋さんに行ったのかというと美容院は発音するとビヨウインで病院を連想させまた本来医療活動を行っていたのは皆さまもご存知のとおり床屋さんのほうなのにかっこ床屋さんの前にある赤と青と白の回るやつは動静脈と包帯をあらわしているというのはあまりにも有名な話ですかっことじそれなのに病院だなんて信用ならない輩だなあと思うのであまり美容院は好きではなくまた美容院もぼくのことを嫌っていますので床屋さんに行ったのです。なので久しぶりかっこ八年ぶりでしたかっことじに床屋さんで髪の毛を切ってもらってそのあと顔剃りというかこの際だからスキンヘッドになろうと思ったので頭ごと剃ってもらっていたのですがそうしたら耳まで切られました。左耳でした。ザグンという厭な音と感触があったかと思うと急に耳元が涼しくなったようなコザッパリとしたような不思議な感覚とともにヌルヌルヌルと温かいものが首筋をつたって流れしました。あまり痛くはありませんでした。ぼくは耳を切られてとてもびっくりしていたので痛がるどころではなかったのです。不思議なことに切り離された耳が落ちる様子はスローモーションに見え花びらが散るようにヒラヒラヒラと優雅に舞い落ちていくかのようでした。落ちた耳はヒタリと音をたてました。床には絨毯のようにはくのか八年分の髪の毛が敷かれており落下の際の衝撃をやわらげたのでそれほど音はしませんでしたがそれでもああ耳が落ちたのだなと気づくには充分な音がしました。床屋のおじさんはあつと言いました。それほど大きな声ではありませんでしたがそれはぼくの片耳が流れ出した血でふさがっていたために実際よりも小さく聞こえたのかもしれませんが。片耳だけプールの中にいるようでした。ですので本当はおじさんはいっと言ったのかもしれませんがそれはもう確かめようがありませんしどうでもいいことでした。

とにかくおじさんはうめき声をもらしたのです。その声につられるようにしてばくもうつと声をもらしました。何と呼ぶのかはわかりませんが顔剃りの際に使用されるクリームが耳に染みてかつ正確には耳があつた場所に染みてかつことじ痛かつたのです。鏡を見ると案の定ぼくの耳元はクリームと血とが混ざりあつたものでピンク色に染まつており何と呼ぶのかはわかりませんがビニール製の躰を覆つて切つた髪の毛が服につくのを防ぐやつを伝つてポタポタと床にまで流れていました。ぼくが呆然とそれを眺めているととて取り返しのつかないことをしてしまつてもも申し訳ありませんどうしませうお客さんどうしませうどうしませうとおじさんはたくさん悲しみのつまつた声で言いましたのでぼくも悲しくなつておんおんおんと泣いてしまいました。するとおじさんはもも申し訳ありませんもも申し訳ありませんと髪の毛と血とクリームと耳で汚れた床に膝と両手について何度も何度も髪の毛と血とクリームと耳で汚れた床に頭を擦りつけ始めました。ぼくがいいのですいいのです顔をあげてくださいと言うとおじさんは顔をあげて鏡越しにぼくの顔を見ました。するとおじさんの額にぼくの耳が張りついているのが見えました。おじさんはあわててこここれは失礼しました申し訳ありませんもも申し訳ありませんと言うと耳をはがしてポンと口に放り込みました。ぼくはおじさんの予想外のびっくりしてえつと言いました。おじさんはグチュグチュグチュとうがいをする時のような音をさせながら頬を膨らませては血と髪の毛とクリームで汚れた耳を唾液で洗淨し始めたのです。ぼくはおじさんはもうけつこうなお歳なのに耳を洗淨するのに足るほどの大量の唾液が出るのだらうかと心配になりました。そしてその心配は的中してしまいました。おじさんがおっおっおつと呻いたと思うと喉のあたりからぐにゅるると厭な音がし頬が倍ほどに膨らみはち切れんばかりになりました。おじさんの顔が一瞬で真っ赤に染まりました。ぼくは風船と想像しました。次の瞬間にはおじさんはうもろろろろとげろを床に吐き出していました。おじさんがお昼に食べたであろう未消化物ででき

たもんじやのようなものがわりと原型をとどめたまま大量に散らばりました。それは一種の完成された料理のように見えました。クリームや血や短いや長いの中くらいの髪の毛や短いや長いの中くらいのお蕎麦の麺が複雑に絡まり合い長ネギの涼しげな緑が彩りを添えており大量の髪の毛も刻み海苔のようにも見えそしてそのげろの丘の頂上にはどういふ偶然なのか耳が悠然と突き立っていました。一見するとそれはとても美味しそうに見えましたかつこ調理過程を別にすればですがかつことし床屋さんの店内には食欲をそそるお蕎麦のおツユの匂いが充満し始めておりましたのでぼくがごくりと生唾を飲んでしまったとしてもそれは仕方のないことだと言えるでせう。おじさんはうつつうつつおれはもうつつうつつおおっおしまいだっおれはおしまいだおれはもうおしまいなんだと床に突っ伏したまま泣きだしてしまいました。なんだかげろを崇めるそういう宗教みたいだなと思いました。ぼくは言いました。いいのですいいのです謝らなくても良いのですぼくは別に気にしていませんしこれはこれでなかなかかつこいいと思いますから別にいいのですそれよりも左右を揃えてくれませんかお願いします。えっお客さんそれじやああなたは。はいもう片方も切り揃えてください。そんなことお願いです耳なんてなくても平気なのですそれよりも左右のバランスが崩れてしまうことは絶対に忌避せねばなりません。それならばお言葉を返すようですがこの切ってしまった申し訳ありません切ってしまったほうの耳をくつつければ良いのでは。いえそれはもうくつつかないでせう。え。既にあなたの胃液で腐蝕しているのです。おそらくはいえ確実に今すぐに病院に駆け込んだとしてもくつつかないでせう。そそそなのでですか取り返しのつかないことをしてしまつて申し訳ありません。ですのもう片方の耳を切るのが今考えられる対策のうちではベストプランなのですそれにぼくは小さい頃から耳なし芳一にあこがれていたので結果オーライですさあ早く切ってください。おじさんはとても悩んでいるようでしたがしばらくするともろもろのもので汚れた両手でパンと頬を叩いて気合いを入れわ

かりました切りますと良い返事をしてくれました。しっかりとした職人の目でした。それからおじさんはぼくの右耳を切りました。今度はミスではなく狙って切ったのでなんの抵抗もなくスツと耳は切れ痛みもほとんどなかったのですが見事な腕前だと思いました。鏡に映してみるとぼくの耳のあった場所にはくの字型の赤々とした傷痕と黒々とした耳孔があるのみでとてもかっこよかったです。おじさんは照れ笑いを浮かべながら耳を拾ってぼくに渡しましたのでぼくは先ほどのげろの上に落としました。するとどうしたことでしょう！　なんとまたしても耳はげろの丘の頂上に立ったのです！　ぼくはおじさんから剃刀を借りると羽を休める蝶のように並んで立つ左右の耳に突き刺しました。美しいオブジェの完成でした。ぼくとおじさんは顔を見合わせて笑い合いました。おじさんは記念です！　この美しい芸術作品を壊すのはもったいないからと言いつつ剃刀ごとオブジェをくれその上代金をただにしてくれました！　かっこいいという粹なはからいでせう！　かっこいいのでぼくはそのお金でお蕎麦を食べに行くことにしました。お蕎麦屋さんにはいた人たちはみんなぼくを見て大声をあげてびっくりしていましたがぼくは両耳が血で詰まっていたプールの中にいるようなものでしたのでよくは聞こえませんでした。なのでそれほど驚いてもいなかったのかなとも思いますがそれは別にどうでもいいことでした。おいしかったです。おしまい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1830u/>

床屋蕎麦

2011年6月18日22時25分発行